



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

2023/01/07

あっさり黙示録 #47

反キリスト帝国はローマ帝国の最終完成形！

黙示録 17 章

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。2023 年がいよいよ始まりました。
今年も激動の予感がひしひしと感じられるんですね。

しかし、こういう激動の時代の中でヨハネの黙示録を丹念に学んでいくことは、とっても意義深いことだと考えています。黙示録は未来が見えている神の視点で書かれている預言書だからです。目先の様々な情報を追いかけることもとても大事ですが、黙示録は、歴史の大きな流れはどこに向かって行ってるのかについてズバリ語っている書物なんですね。

黙示録によると、人類はやがて、歴史上最も困難な時代に突入して行きます。
それは7年間続く**艱難時代**です。艱難時代の前半3年半は、宗教が世界を支配する時代です。世界には色んな宗教がありますね。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教・仏教・神道・ゾロアスター教、その他色々。それらを一つにまとめる**世界統一宗教**が現れ、7年間の前半3年半の間、世界中の人々を内面からコントロールする。

黙示録では、この世界統一宗教を**大淫婦**と言っています。大淫婦は**獣**の上にまたがっています。獣は**反キリスト帝国**です。獣が個人を指す時は反キリストその人ですが、組織として指す時は反キリスト帝国のことです。

ところで、大淫婦は獣のどの部分に座っているのか。胴体ではないんです。
この獣には**10本の角と7つの頭**があります。その**7つの頭**の上に座っているんですね。
では、**7つの頭**とは何でしょうか。

黙示録 17 章

9ここに、知恵のある考え方が必要です。

七つの頭とは、この女が座している七つの山で、それは七人の王たちのことです。

大淫婦は**7つの頭**の上に座っています。**7つの頭**の意味は2つで、**七つの山と七人の王たち**。
この2つの意味を兼ね備えています。

7つの山。これは比喩です。聖書で**山**を比喩で用いる時は、**国家・国家体制・支配形態**などを表すことが多いんです。

詩篇 30 篇

7主よ あなたはご恩寵のうちに 私を私の山に堅く立たせてくださいました。

ダビデ王はイスラエル 2 代目の王様で、初代王から目の敵にされ、命をつけ狙われて、国中追いかけて回されました。一時は風前の灯火まで行きますが、初代王が倒れた後、ダビデ王家は盤石の体制を築き、揺るがずビクともしない安定期に入っていきます。その時のことです。

主よ あなたはご恩寵のうちに 私を私の山に堅く立たせてくださいました。

「私のダビデ王家という山を、堅く揺るがないものとしてくださいました」と、感謝を献げた祈りです。山は支配体制や国家体制を意味します。

それを考えると 7 つの山は、獣をルーツとし、世界に絶大な影響を持つローマという支配体系の 7 つの発達段階。その 7 番目の発達段階が**反キリスト帝国**なんです。

7 つの発達段階にはそれぞれ代表的人物がいます。それが **7 人の王たち**。

今日は**黙示録**で最も難解な箇所、ローマの歴史が予備知識にないと分かりにくいんです。

これを理解するために、ローマの歴史を“ざっくりローマ史”みたいな形で、ザーッとご紹介します。

1) ローマはいつ出来たのか。BC753 年。七五三（しちごさん）と覚えたらいかがでしょう。

建国したのは双子のロムルスとレムス。非常に不遇の中にあっただのですが、とても仲のいい兄弟で、2 人で力を合わせて仇敵をやっつけ、遂に国を造ろうとします。

その時、どこに国を造り、どこを首都にするかで兄弟喧嘩。

反目し合って、とうとう兄のロムルスが弟レムスを殺害して決着をつけました。

ロムルスのロムからローマという言葉が出来たんです。

ロムルスが建国宣言をしたのが BC753 年。王が支配する統治体系/**王政**の国がローマの元々のルーツです。**1 番目の山は王政**。王政は約 250 年続きます。

2) BC509 年、タルクィニウス王の時に王政が倒れます。彼にぼんくら息子がいました。

親が甘やかして、「何でも俺の言いなり。俺の言い分は何でも通る」と。

ある時、貴族の妻をレイプして辱めます。しかし、王子なのでだれも彼を罰することができない。彼が去った後、乱暴された妻は夫と父・一族の長老たちを集め、ついさっき自分の身に起こった事を赤裸々に告白し、皆の目の前で、隠し持っていた短剣で自らを刺して自害したんです。

それを見ていた彼女の夫の親友 ブルータスが「なんという悲劇だ！王子やったら何してもかまへんのか！こんな王族が我々のローマ国に必要か？もう要らんのじゃないか！」と決起します。

このクーデターが大成功し、王一族はみな追放。王政が終わり、**貴族支配体制**が成立しました。

2 番目の山は貴族政治。

「王という独裁者支配が二度と起こらないように、何でも話し合いで決めよう」と、貴族たちが議会を持ちます。これが**元老院**です。

また、主流は貴族ですが、平民も入れる**民会**（みんかい）という議会を持ちました。

実際の行政を行うのは執政官・政務官たちで、彼らも貴族です。

だから貴族政治。しかし、これも途中で変質してしまいます。

3) BC494年、『聖山(せいざん)事件』が起こりました。これは平民のストライキです。ローマ国はまだ帝国ではなく、周りはローマより強いんです。だから負けてしまうことがあった。負けないで自治と自由を守るためには強くなければならない。強くなるには強い軍隊を持たねばならない。強い軍隊の兵士は平民ですよ。平民がローマ兵になるのですが、給料はないんです。更に、武器や防御の盾などは兵士が自腹で用意して、そして国のために戦争に行くんですよ。ローマは国が兵士のために武器を支給して、「国のために戦ってください」じゃないんです。

負けたら平民が奴隷になるという運命ですよ。それで、自分たちの安全を守るために戦うということで公の意識が非常に強く、彼らは国のために戦うことを非常に名誉だと考えました。なので、自前で兵士となって戦う。そして、勝利して自治を守る。

勝ったら当然 領土が増えます。たくさんの実入りがあります。だれの物になるか。貴族です。政治を牛耳っているのは貴族だから。

そんなことが続く中、平民たちが「ちょ、待ってえな。命投げ出して働いてんのは平民の俺らや。戦争に勝ったら貴族ばかりいい目して、俺たちにおこぼれがないってどういうコト? そんなんやったら、ちょ、やってられへんわ。」

聖山に立て籠もって「貴族のために働くのはやめた!」ストライキですよ。

「ローマ軍、今ストライキしてるぞ」と周りの国に知られて攻め込まれたら一溜りもないし、そうならば平民たちも困るじゃないですか。でも、彼らはもう失うものがないから困らないんです。

「もうやる気ないし、もうええわ!」これは貴族にとってもヤバイ。

貴族側が大幅に譲歩して、BC494年 ここから**貴族平民混合政治時代**になります。

3番目の山は貴族平民混合政治体制。

ここから徐々に、貴族たちが平民たちの権利を認めて行きます。

それまでは身分制度がハッキリしていたので、貴族と平民の結婚なんてあり得なかったのですが、これ以降、貴族と平民の結婚オッケー。

また、護民官という役職が作られて拒否権があるんです。元老院で平民に不利なムチャクチャなことが決められても、「貴族であってもそんな事させへん。ノー」と言う権利が与えられました。

そして、「ちゃんと法に基いて平民の権利も守りましょう。」

ローマ史上初の成文法律を作ったんです。12枚の青銅の板に書かれたので『十二表法』。

ローマ法の基礎。今の西洋の法律体系の基礎と言われています。

4) ローマは戦争が続き、じわじわ領土を広げて行きます。

ローマ兵である平民は、戦争がない時に何を生業にしていたのか。農業です。

ローマは商業を軽蔑しました。自分たちが製造したり作ったりしたのを売るのではなく、右の物を左に持って行って、左の物を右に持って行くというような、出来上がっている物を商いするだけで儲かることを卑しいことだと考えたんですね。

平民は農業をやっているのですが、戦争が長引けば、田畑を耕す一家の大黒柱が兵士なので、残っている家族、おじいちゃん・おばあちゃん・母ちゃんの三ちゃん農業みたいなもの。

おじいちゃんが体力なくなって倒れたりしたら、もう男手は無い。畑を耕す人がいない。畑は荒れて行く。ダメになって来る。そこで銃後の守りの人たちは、お金を持っている貴族に畑を売るんです。「どうぞ、うちの畑を買ってください！」戦争終わって平民の兵士が帰って来たら、自分の畑が貴族の物になっている。財産無いんですよ。

その時 BC2 世紀末に『マリウスの大改革』がありました。マリウスという人物が、戦争から帰って財産が無くなっている兵士たちを全部まとめて、彼らの畑だった所で働かせてあげる。もちろん収益は自分が貰うんですよ。でも、働かせてあげる。兵士たちの給料は自分のポケットマネーで払ってあげる。それだけでなく、兵士たちがもう戦争にも行けず、畑も耕せなくなった時は年金を払ってあげる。そうやって、兵士たちに手厚い保護を与えるようになった。

それによって、軍隊の性質ガラッと変わるんです。それまではローマという国家のために戦った。ところが、そのような体制に変わった時から、ボスのために戦うようになったんですね。忠誠心の向きが国家ではなく、サラリーを払ってくれるボスに向けてしまったんです。結局、ローマの中に小さな国がたくさんできる形になりました。**軍閥政治**ですよ。それでローマの中がごたつきます。軍人中心。**4 番目の山は軍閥時代**。

5) 軍閥政治の内乱を収めるために、突出したリーダーたちが現れました。

しかし、ローマ人は独裁者が嫌いなので、トップ 3 が力を合わせてコントロールしていきます。これを**三頭政治**と言います。

何回か三頭政治がありますが、特に BC1 世紀半ば頃、ローマで一番金持ちのクラスス、ローマ最高将軍のポンペイウス、ローマで最も人気のカエサル、この 3 人が、もちろん「やがては俺が天下取りたい」と思っていますが、そんなのはおくびにも出さずやってたんです。

カエサルは英語でシーザー。カエサル（シーザー）は名門貴族ですが金が無い。金が無かったらローマでは政治できない。それで、ローマ最大の借金するんです。ローマでナンバーワンの金持ちのクラススから借りるんですよ。借りて借りて。でも、借りれるのもすごい。担保が無いのに、銀行は金貸してくれますか。貸してくれませんか。

クラススは、何も持ってない貧乏貴族の末裔カエサルが頼む借金を、全部かなえてやるんですね。「こいつに貸しても、ちゃんと返してくれる」と思わせる魅力がカエサルにはあったんです。実際、戦争に行ったらすぐに借金帳消しにするんです。そして、また借金するんですけど。最終的にクラススからものすごい借金するんですが、クラススが死んでしまったので返さなくて済んだと。「なんやねん、それ？」みたいな話ですよ。

三頭政治のクラススが死んだので、残りはポンペイウスとカエサル。

2 人は政略結婚で結ばれていました。カエサルの娘ユリアがポンペイウスの妻。そんな関係ない。それぞれがローマのトップになりたいと思っていて、それは避けられないことでした。

最終的にはポンペイウスが敗れてエジプトまで逃げて行った。それをカエサルが追いかけて行く。ポンペイウスは暗殺され、そして、カエサルがエジプトで劇的に出会ったのがクレオパトラです。クレオパトラはカエサルの子を妊娠するんですね。その話はいつか別の時にしたいと思います。

唯一残ったカエサルは、皇帝になりたいという下心が見え見え。
三頭政治で2人倒して自分1人になって、終身独裁官になって…1か月後に暗殺されました。
5番目の山は三頭政治。

6) ローマ人は独裁者・皇帝ができるのを恐れていたのですが、カエサルが亡くなった後、困ったことになりました。カエサルが養っていた膨大な数の兵士が「俺たちの給料、だれが払ってくれるの？」と、主君を打たれたことで元老院に怒りを燃やすんです。

この怒りを宥めるには、やっぱり独裁者であろうが何であろうが必要やでと。
それで、カエサルが養子にしていたオクタ비아ヌスに、「ローマ国を円満に治めるために、皇帝になってください。」このように乞われて、ローマに初めての皇帝が生まれました。
BC27年、遂に**帝政時代**が始まったんですね。**6番目の山は皇帝によるローマ支配。**

初代皇帝がオクタ비아ヌス。アウグスト/アウグストゥス（神聖なる者・尊厳ある者）という尊称で呼ばれました。アウグストは8月生まれ。8月は英語でAugust（オーガスト）。自分が生まれた月だから、自分の名前を付けたんです。
義父のカエサルも同じことをしました。カエサル（ジュリアス・シーザー）は7月生まれ。7月は英語でJuly（ジュライ）。自分の名前にちなんで。
暦の月を自分の名前にして、皆がははーって従う。凄い権力だと思いませんか。それが独裁力です。

これらがローマの6つの段階です。6段階目のまま西ローマ帝国と東ローマ帝国に分かれますが、それぞれの皇帝が滅んだ時、帝国としてのローマは消滅してしまうんですね。

黙示録 17章

10 五人はすでに倒れましたが、一人は今いて、もう一人はまだ来ていません。彼が来れば、しばらくとどまるはずです。

五人はローマ帝国の今までの5つの発達段階。**王政**に始まって**三頭政治**。これは全部終わった。

一人は今いて。6番目が今いる。今はヨハネが黙示録を書いている時代です。
その時ローマ帝国は**皇帝支配時代**で、**11代目皇帝ドミティアヌス**が牛耳っていました。
その時代にヨハネはパトモス島に流されて、黙示録を書いていたのです。

もう一人はまだ来ていません。東西ローマ帝国は滅んだが、未来にもう一人現れる。
ローマ帝国出自の、大きな力を持つ独裁者が現れる。反キリストのことです。
7番目の山は反キリスト。

彼が来れば、しばらくとどまるはずです。しばらくは3年半。
7年間の艱難時代の後半3年半の間、反キリストは全世界を牛耳るのです。

11 また、昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。
ここは黙示録の中で一番難しいと言われている箇所ですが、少し解説させていただきます。

昔はいたが今はいないあの獣は反キリストです。

8 あなたが見た獣は、昔はいたが、今はいません。

やがて底知れぬ所から上（のぼ）って来ますが、滅びることになります。

この訳はあまりよろしくないんです。私たちは日本語で読んでいますが、原本はギリシア語です。原本の黙示録の写本を何回読んでも、「昔はいたが、今はいません」の「昔」と「今」は無い。聖書の原本に出て来ない単語を、読者が分かりやすいようにという善意ではあるのですが、翻訳者が勝手に入れてしまったんですね。これはちょっとまずかった。

直訳は、**あなたが見た獣は、存在したが、存在しません。やがて底知れぬ所から上って来ます。**

反キリストはある時 存在するようになります。が、存在しなくなります。暗殺、殺害されるから。ところが、**やがて底知れぬ所（死後の世界のアビス）から上って来る。**殺されるけど生き返る。しかし、生き返った反キリストは**滅びることになります。**

すなわち、反キリストは登場します。そして、殺害されますがよみがえります。

それを見た人々は彼に従いますが、地上再臨のキリストの裁きによって彼は滅びます。

11 また、昔はいたが今はいないあの獣は八番目の王ですが、七人のうちの一人でもあり、滅びることになります。

“昔は”も“今は”も本当は無いんですよ。存在したが、死んで存在しない。

七人のうちの一人でもあり。これはローマ帝国の7つの発達段階の最終形です。王が7人出て来ます。7つの支配体制の最後に出て来る代表的人物が**反キリスト**。だから、七人のうちの一人と言っているのです。

あの獣は八番目の王です。艱難時代に入る時、世界は10か国連合になっていて、10人の王たちが世界を支配しています。この10人とは別に、11人目として反キリストが登場します。艱難時代に入って3年半経った時、10人のうちの3人が反キリストに逆らって倒されます。そうして、7人の王たちは反キリストに従うようになるんですね。

この7人の王+8人目の反キリスト=8人の王。この8人が揃っているのが**反キリスト帝国**です。序列は8番目の反キリストが一番偉い。

その下に7人の王たちがいて、世界をコントロールしているという構図なんですね。

なので、昔はいたが今はいないあの獣（反キリスト）は**八番目の王**とは、反キリストが生きている時代で8番目の王という意味です。

さて、昨年2月にウクライナ戦争が始まりましたが、あれはロシアの帝国主義です。



ロシアの国章は双頭鷹で、ローマ帝国の紋章をそのまま引き継いでいるんですね。そして、帝国主義の源流はやっぱりローマなんです。

ローマが人類に残して来た影響力には凄まじいものがある、これについては別に動画を撮って紹介したいと思います。

今、ヨーロッパは元気がないように見えますが要注意です。

やがて、全世界を支配する反キリストは、ローマ／ヨーロッパから出て来ることが明記されているからです。

このような歴史の大きなうねりの中にある今の世界情勢を、一緒に分析しながら読み解いて行きたいと考えていますので、今年もよろしくお願ひします。

チャンネル登録もお願いします。ではまた ごうちゃんねるでお目にかかりましょう。
皆さん、お元気でいてください。さよなら！



☆引用：新日本聖書刊行会「聖書 新改訳 2017」 いのちのことば社,2017
「ロシアの国章」 Wikipedia